

□朝日新聞社朝日21関西スクエア主催

対談シリーズ「言葉ほぐし」第1回目

2012年5月26日(土)、大阪市北区のザ・フェニックスホールで

ゲスト 俳優麻生祐未さん

NHK朝の連続テレビ小説「カーネーション」の母親千代役で人気

ホスト 哲学者で大谷大学教授 鷺田清一さん

□対談

朝日新聞大阪本社 阿部圭介・編集局長よりご挨拶

朝日新聞大阪本社では、昨年まで阪大の総長を務めておられた鷺田先生をホスト役にしまして、対談シリーズを始めることにいたしました。パンフレットにも書かれていますが、関西に何かしらゆかりのある女性をお招きし、鷺田先生との対談の中で言葉の色々な魅力・優しい言葉・皆を元気にしてくれるような言葉、そういったものを探していく、そんなツアーのような対談を考えています。今日はその第一回です。私も大変個人的に楽しみにしています。麻生さんが出ておられたNHKのカーネーション、毎朝見ていましたが、私の家では毎朝妻が玄関まで送ってくれますが、カーネーションがやっている間は全く口もきいてくれませんでした。妻も言っていました、色々なドラマを最初から最後まで見たのはこれが最初だと言っていました。その中でも色々なキャラクターの方がおられましたが、麻生さんの天然な感じが良くて、非常に印象に残っています。今日のテーマの演じ分けでいいますと、あの天然な感じからシビアな役やセレブな役まで、自在に演じ分けてこられた麻生さんの秘密を鷺田先生の話術で引き出して頂ければ楽しいと思います。

鷺田先生

今年1年間、関西にゆかりのある女性をお迎えして、「言葉ほぐし」という対話シリーズを始めさせて頂くことになりました。「言葉ほぐし」は何かと言いますと、本日お配りしたプログラムに趣旨が書いてありまして、読ませてもらうと、「少子高齢化、財政危機、原発事故、復興……。私たちは何かと気苦労が多く、変化に対して身構えないといけない時代、縮こまった『肩こり時代』に直面しています。そのなかで、鷺田さんと女性たちの対話のなかで、『気になる言葉』、『ひっかかる言葉』をとりあげて、言葉をほぐし、そして時代をほぐして、困難を乗り越え明日への元気につなげたいと思います。」と非常に上手く趣旨をまとめて頂けて喜んでいきます。

例えば、去年から今年にかけて一番世の中をよく駆け巡っていた言葉に「絆」があります。絆が大切だということは誰もが思うことで、特に今回皆そう思いましたが、よく考えてみると、被災地、特に福島の場合でしたら放射能の汚染を強く受けた所では、例えば家族と言う絆、職場での絆がむしろ断ち切られるという、そういった瀬戸際にきていることが多いです。例えば、元の自分の住まいに戻るのか、子供がいるからこの際これまでの生

活の地から離れるのか、家族の中あるいは会社の中でもそういった重いやりとりがなされてきて、絆が切れそうになっている、そういった思いの方が強くて、「絆」という言葉は本当に被災地の人に必要な言葉なのか、あまりにも大切過ぎて一々そういう事を標語のように掲げるといふ気にはならないのではないかと思います。そう考えると今回の被災地の状況を見ている被災地外の人が、自分達が本当に大切にしなければならないものとして、自分達の生活の中に再発見しようとしている、その時の言葉ではないのかとも思います。このように皆が「絆」という言葉を言いますが、本当にその言葉が一体どのように、それを口にするるとどんな働きがしてしまうのか、誰が誰に向けて言う言葉なのか、あるいは「絆」を本当に大切にするのであれば何をしなければならないのか、色んな「絆」という言葉をただ口にしてイメージで安心するのではなく、その言葉の持っている含みと言ったものもきっちりほぐしていく必要があるのではないのだろうか、そして今何をすればいいのかと考える必要があります。

そういった意味では、例えば、私達は今まで絆ということでは一番に家族のこと、そして同じくらいの重さで職場のこと等を考えてきましたが、私の印象では昔はもっと市民一人一人が色んな役を演じてきたように思います。例えば地域ではおじさん・お婆さんの役。よその子だからと言って関心を向けないのではなく、よその子のことも心配する、知らない子のことも心配する、あるいは小言も言う。そういったおじさん・お婆さんの役が多くの人によって演じられてきたということがあると思いますし、そういう役を、どうも私達は最近あまりしなくなったのではないかと思います。一方でボランティアという役をしたり、或いは今回震災の事で政治家や専門家と言う方々への信頼がやや損なわれたところもあり、これまでのように専門の人達に全て任せるだけではなく、市民として引き受けなければならない役があるのではないかと、そういった事を色々「絆」という言葉と共に感じさせられます。

色んな役を私達はもっと積極的に演じていかなければいけないのではないかと、果たしていかなければならないのではないかとということで、今回第1回は「演じ分け」、或いは「演じ分ける」という言葉をほぐしていくという、そういうチャンスにしました。

そして演じ分けということになりますと、私の場合俳優さんをつい思い浮かべますし、そして私にとっての印象ですが、カーネーションを見ている時に、私も朝早くの用がない時はBSで見てから1チャンネルで見て、その後お昼休みに45分で見て、7時半からもう1回BSプレミアムで見て、多い時は4回見ていました。その麻生さんが、それまでは「仁」というドラマで、すごい武家のしっかりした怖いくらいのお母さんの役をされていて、綾瀬はるかさんが可哀想だなと思ったこともありました。かと思うと、「窓際太郎さん」ではすごくおしゃべりで、「なんだこの方は!？」と想像がつかなくて、この方に対談の相手になって頂こうと迷わず決めました。その方が麻生祐未さんです。

鷲田さん

カーネーションでは総出演時間が主人公の糸子さんよりも長くて。

麻生さん

そうですね、糸子さんの子供時代の時からお母さんをしていましたから、結局たくさん出させて頂くことになりました。

鷺田さん

撮影はこちらで？

麻生さん

撮影は全部大阪で。ロケでは京都や岸和田に行ったりしていました。

鷺田さん

実生活でもお母さんでいらっしゃいますが、まだお子さんは小さいですか。

麻生さん

今7歳の男の子がいます。

鷺田さん

東京と大阪の行き来はとても大変ですね。

麻生さん

そうですね。結局長く離れることになるので最初はそれが1番心配でしたが、7歳で小学校も始まるし、お互いに良い試練だなと思い、「お互い頑張ろうね」とか「自分で宿題しようね」と言って頑張りました。

鷺田さん

大変でしたね。

麻生さん

そうですね、まだ寂しい時期ですから「どうしてそんなにお仕事するの？」「どうしてそんなにお仕事楽しいの？」と聞かれましたが。

鷺田さん

お子さんにですか？

麻生さん

はい。「今の役は楽しいの？」とか、時々変な質問をするので困りますが。

鷺田さん

なかなかきつい質問ですね

麻生さん

そうですね。

鷺田さん

いたい言葉ですね。

私も週に1・2度東京に行きますが、新幹線でお見かけしたことありませんが、いつも何号車に乗っておられますか。

麻生さん

お会いしたことなかったですね、残念ですね。今回は本当にお招きありがとうございます。今日はとても緊張していますが、中々こういった機会がありませんので。

鷺田さん

宜しくお願いします。

大阪は久しぶりですか？

麻生さん

大阪は生まれが泉佐野市で、今現在も親戚がたくさん住んでいますが、私も10年程前に子供はこちらで出産していますが、何度か戻ってきているので帰ってきたという感じはあります。

鷺田さん

さて、いよいよ演技分けということを色んな角度からおうかがいしていこうと思っておりますが、やっぱり今まずはカーネーションの話から入りたいなと思います。

「カーネーション」の主人公糸子のお母さん・千代さんという方を演じられました。お嫁さんであり、奥様であり、お母さんであり、おばあさんであり、初回からずっと演じてこられていますが、千代さんのシーンで一番印象に残っているのはどれでしょうか。

私は、糸子が社交ダンスのドレスを作る時に、社交ダンスがどんなものかを聞くときに、お母さんが突然、神戸の娘時代を思い出してサァっとされて、カチャッとチャンネルが変わるようなシーンが一番「うわあ、エレガント」と印象に残りました。

鷺田さん

意外と、口で慰めるのではなく、体に手を当てたりそっと抱いたりする事が多かったですね。

麻生さん

そうですね。今回は手にすごく気を付けていました。色々役によって考えますが、今回は着物を着ている人だったので、そうすると動きが限られてくるものですから、表情を出さないで、手の動きはわりと色々な表現が出来るものなので、それをたくさん使っていこうと思いました。というのは90代まで演じることがわかっていたので、年を取ったら着物の中で体を小さくしようと思っていたので、若い時は出来るだけちょっと大きめに手を使ってみようかなと思いました。

鷺田さん

そうですね、すでにそういった工夫のお話が。

鷺田さん

タワシのシーンも面白かったですね。

麻生さん

話の流れとは関係ありませんが。別に窓を拭くとか台本には書いてありませんでしたが。

鷺田さん

本筋とあんまり関係ないんですか。

麻生さん

私が演じた千代さんというキャラクターは、あまり話の流れを左右する人ではなくて、わりと聞く側だったり、リアクションだったり、周りの人によってどうするかという人なので、ちょっとだけ話の流れが変わったりということなので、そういう言葉でしゃべるよりもちょっと変わった行動など、そういうところでキャラクターが出せればと思っていましたね。

(鷺田さんが客席に「印象に残ったシーンは？」と質問を促す)

客席から

私が印象に残っているのは最後の方ですが、ご主人の小林薫さんの回想、幻のように出てきてお酌をするところがあり、そこが非常に今までの千代さんとは雰囲気違っていてジーンとききました。

麻生さん

あれが最後のシーンになりましたけれど、お酌をするというのは確か小林薫さん（主人公・糸子の父親善作を演じた）のアイデアだったと思います。

鷺田さん

ほかの俳優さんがアイデアを出される場合があるんですか？

麻生さん

実際とても多いですね。小林さんはとてもアイデアが豊富な方なので皆が助けられていましたが、「ここはこうしたら面白いんじゃないか？」とか。あの時も何か月ぶりにスタジオにいらしたのに「こういうふうにしたら良いんじゃないか？」と小林さんのアイデアで。確か台本では微笑み合うぐらいだったかもしれませんが。

鷺田さん

私は台本というものを見たことがありませんが、台本には身振りの事などあまり書かれていないんですか。

麻生さん

それはいろんなジャンルや台本にもよって、すごく細かく動きの指示まで書いてあるものもありますし、天気を書いてあったり風が吹いてくるとか、ちょっと間を取ってなど、細かく書いてあるものもありますし、全く書いていないものも色々あります。

鷺田さん

先程「聞き役ですから」とおっしゃっていましたが、つまり自分で何かを主張するというより家族のいろんなメンバー、みんな元気な人ばかりですから、むしろそれを受け止める側とか黙って心配する側とか、いわゆる聞き役的な振る舞いが多かったと思いますが、聞き役って、台詞が難しくないですか？

麻生さん

そうですね。難しいけれど私は楽しいですね。

今回は時代背景的なものもあって3歩下がって歩く女の人だし、「受けの芝居が多いんですけど、ちょっとつまんないかもしれないんですけど」みたいな雰囲気をもっと最初にお話を伺ったんですが、逆に私はそれが面白いなと思って。人の受け止め方は様々で、聞き方でいろんな反応が出来るので、それを楽しんでいこうと思いました。

鷺田さん

そうですか。だからこそいろいろと仕草とか体の動きとかをすごく工夫されたんですね。

麻生さん

そうですね。話をちゃんと聞いていたり、聞いてるふりで聞いていなかったり、様々ですからね。日常で出来ないことがいっぱいありますからね。

鷺田さん

そうですね。不思議なことで人の話を聴く時って、知り合いのホスピスのナースの方に聞きましたが、ホスピスの場合は限られた命でその人の話をとにかく丁寧に聴いてあげる、普通の看護師さんだったら次から次へローテーションで交代ですが、ホスピスの場合は1人の決まった方の話を聴かれる時に、安心して話してもらえる時は、後で気が付いたと仰って、必ず、ベッドの横から覗き込むのではなく、顔の向きを一緒にする事と、手が腰か太ももかに必ず手を置く、それがコツだということを仰ってたことがあります。

麻生さん

やっぱり伝わるんですね。

鷺田さん

それと、いま麻生さんがおっしゃった通りで、上手に聞き流さないと自分もたないと言って、聴いているその場ではパシッと受け止めるんですが、すぐその場でアースする（流していく）と言って。

麻生さん

そうですね。受け止めるものは受け止め、受け止められないものは聞き逃したり。

鷺田さん

聞くというのは、細かくそれも演じられたんですね。

麻生さん

そういうのは今回すごく台本に色々書かれていたので。分かっているふりをして聞いているけれどたぶん分かっていない、など。それはそういう面白いキャラクターで私も楽しかったですけどね。

鷺田さん

先程朝日新聞社の方も「天然」とおっしゃっていましたね。

麻生さん

「天然」って良い言葉だと思います。最近「千代さんは天然ですね」と言われて、そうだなあと思っていたんですが、「麻生さんも天然ですね」と最近よく言われ、前はそうは思っていなかったんですが、それに便乗するとすごく楽だなと言うことに最近気が付いて、「私は天然なんです」と最近言う事にしました。天然だという役にしておいたら楽ですね。説明するのが楽というか、そういう時は「天然です」と言ってしまうかなと。

鷺田さん

でもその割にすごく啖呵（たんか）を切るようなものとか、半狂乱の状態でわめくとか、そういうコミカルな、「天然」とは思えない役も。

麻生さん

そうですね。色んな役をいただいているので、最近本当に日常生活では、ストレスなくいろんな役で楽しませてもらっていますね。

鷺田さん

それを今日は色々コツを教えてくださいたいんですが。

今日は実は数分間ですけどもこれまで麻生さんが俳優としてデビューされて、最初モデルさんでしたか？

麻生さん

モデルの経験はないんですが、大学時代に化粧品メーカーのキャンペーンをやったことがあって、それが最初ですね。

鷺田さん

それは今もちゃんと使っていらっしゃいますか？（会場、笑）

麻生さん

はい。

鷺田さん

何十年間は分かりませんが、これまでの色んな演じ分けられたシーンが出てきますのでご覧頂きたいと思います。

【DVD上映】

鷺田さん

本当にいろんな役を演じられていますが、そもそも演じ分けるという感覚はおありなんでしょうか。

麻生さん

あまりちゃんと考えたことはありませんが、一人一人のキャラクターや人生をきちんと作ってあげないと、その人が生き生きしないし可哀想なので、それは一生懸命考えますが、1日の中で3役や4役やることもありますので、その辺りはキャラクターを分ける事は考えています。

鷺田さん

それはいきなりスイッチが入れ替わるんですか？それとも実は一人きりになる時間の間に、体の姿勢や気分など全て変えていくような助走体勢のようなものはありますか？

麻生さん

私の生活はとてもバタバタしていて、朝は早く起きて、お弁当作って、子供を出して、それから何役かやる中、毎日走っている感じです。その場所に言ってそれをやってといった感じになるので、あまりゆったり深くは考えていません。

鷺田さん

1日3つも4つもすると。

麻生さん

そうになってしまう時も（スケジュール上）ありました。とても楽しいですけどね、今は。

鷺田さん

小さい時からそういう事が好きだったんですか？

麻生さん

小さい時はとても人前で、こんなにたくさん人がいたら倒れていたとか、国語の時間に教科書を読みなさいと言われたら、気が付いたら保健室で寝ていたとか、それくらい緊張して吃音（きつおん）になってしまうし、顔も真っ赤になってしまうし、そういうタイプでした。コミュニケーションを取るのが下手な子どもでした。一人で絵を描いて遊ぶとか、そういう子どもでしたが、それでは段々上手くやっていけないということが分かり、何か

人と繋がる方法というか、やっぱり自分から何かしないとダメなんだなということがきっかけで、「あれやってみようかな」「じゃあ次はこれやってみようかな」と段々それが今に繋がってきている気がします。

鷺田さん

最初は勇気がいったでしょうね。

麻生さん

そうですね。最初は言葉を使わない、例えば絵を描いてほめてもらったら嬉しくてそこから誰かと喋ったとか、次は何か楽器をやってみるとか、言葉が一番最後だったんですけど、なぜか今この仕事やっていますが。

鷺田さん

俳優になろうと思われた一番最初のきっかけは何だったんですか？

麻生さん

芸術的な要素が全部入っているものなので、映画やドラマだったり、色んな要素で楽しめるし……。最初の頃は何も勉強しないで入った世界なので、本当に反省ばかりで上手くいかなかったんですが、その中で「次を頑張ろう、次を頑張ろう」と続けてきたんですが「やっぱり私は下手だよなあ」という思いがあり、20代の後半にお仕事を休んでもう一度学生生活に戻ってみようかなと思う時期があって、お休みした時期はありました。

鷺田さん

そんな事が初期の頃におありだったんですね。

麻生さん

やっぱりお客さんとしてみたら、「この人はちょっとつまらないな」とか、「この人はどうかな」とか、これは恥ずかしいぞと思って見ていたので、申し訳ないなと思いました。

鷺田さん

想像出来ないですね。あんなに迫真的に演じ分けられているのにびっくりしました。

でも、我々は日常生活で、先程「天然だと楽だ」とおっしゃったように、集団生活の中であるキャラを決めてしまってこれを演じると決めた方が、言葉が出やすくなり、かえって素の自分と素の他人が会う時のほうが緊張するということがありますよね。

麻生さん

そうですね。最近特に思いますが、私は仕事として色々な性格の人間をさせてもらっているの素の自分分からないと言うか、私はどれに近いのかなとか。もちろんどの人間にも私の要素は入っていると思いますが、どんな人間なのかなと今でも分からないですね。でも実際仕事とはいえ、その環境やその時間によっては自分を変えられたりするので、それは仕事から逆に学んだというか、今でも仕事以外で色々な環境に行く時がありますが、「これはちょっと頑張ってみようかな」と思うことがありますね。

鷺田さん

自分がある役柄を演じる、それもある期間ずっと集中的に演じることによって、自分が後でふと変わったなと感じる時もあるんですか。

麻生さん

そうですね。まだまだですが「ああここまでは出来たんだ」等の発見はありますね。

鷺田さん

お相撲さんでも、地位が上がっていかれると共に、何となく顔付きとか言葉まで変わっていくことがありますよね。

麻生さん

不思議ですよ。まだまだこれから変わり続けたいですけどね。たくさん学べば変われると思います。

鷺田さん

20代の頃に数年間お休みになった時があったというお話がありました。

麻生さん

29歳ぐらいだったと思います。丸々お仕事を休んだのは1年半ぐらいだったと思いますが、しばらくまた大学生活に戻りました。

鷺田さん

29歳で大学に戻られたんですか。

麻生さん

そうですね。20代前半までとは違う大学に行って、全く演劇とは違う生活をしていました。

鷺田さん

専攻は？

麻生さん

専攻は本当に関係ないですが科学です。

鷺田さん

化学ですか？

麻生さん

いえ、アメリカでしたのでサイエンス&テクノロジーです。

鷺田さん

科学技術、すごいですね。

それが29歳で、アメリカの大学ですか。

しかも科学技術という、サイエンス&テクノロジー。

大学時代は何の専攻でしたか？

麻生さん

日本の大学では文学部の英米文学でした。

特に何かを研究していたわけではありませんでしたが、たまたま自分の好きなクラスがその学科にたくさんあったものですから、あまり先を考えずに取ってしまいました。

鷺田さん

それはびっくりですね。

麻生さん

1年ほどしか行けなかったのですが、とても勉強になったし、楽しかったし、続けたかったんですが、勉強大変でしたね。仕事との両立はちょっと難しかったです。

鷺田さん

アメリカの大学は宿題が多いですからね。

麻生さん

多いですね、びっくりしましたね。

鷺田さん

何冊も週に読まされたり。

麻生さん

全然違いますね、日本の大学と。

鷺田さん

演劇や文学語系から「じゃあ歴史を勉強しよう」や「政治を勉強しよう」だったら分かりますが、科学技術まで飛ぶというのがまだよく分からないです。

麻生さん

広く浅く好奇心旺盛だったからか、知らない事を勉強したいなと思ったのか、ちょっと無謀でしたね。

鷺田さん

日本にお帰りになってからは科学技術の事は？

麻生さん

まったくやってないですね。

それから仕事に戻ってしまったので、そこで終わってしまいました。

鷺田さん

そうですね。それは一度演技というか、俳優というお仕事から離れてみたいというお気持ちか？

麻生さん

それもあったのかもしれませんがね、今思うと。でも離れてみたのは本当に貴重な良い時間で、特に日本を離れたということもあって、日本人はどういう風に見られているのかな、一個人がこんなもんなんだな、とかのより客観的に自分を見る練習が出来たかなと思います。

鷺田さん

それからはそういった外国の映画とかは出られましたか。

麻生さん

そういうお仕事はしていませんね。

鷺田さん

そうですか。それが20代で、その後はずっと？

麻生さん

現在に至るまでずっとお仕事ばかりしてきました。

鷺田さん

母親業も？

麻生さん

そうですね。

鷺田さん

お子さんはお一人ですか。

麻生さん

一人です。

鷺田さん

いわゆる俳優としても色々演じ分けてこられたと同時に、さっきはご自身の問題を上げられましたが、今度は母親という役もお勤めされていて、その時はもちろん演じているという言葉ではないですよ。

麻生さん

そうですね。演じるどころではなかったですね。本当にお母さんというのは、もしかしたら世の中で一番大変な仕事かもしれませんが、想像していた以上に大変なお仕事で初めての事の連続で毎日大変でしたね。今でも大変ですが。

鷺田さん

核家族が標準になった以降のお母さんは厳しいですよ。ある意味24時間一人で（子どもに）向き合うみたいなのがあって、仲の良い友達でも数時間は楽しいですが、5時間にもなると一緒に居るのが嫌になりますもんね。それが24時間ということ想像する度に私は気の毒だなと思ってしまいます。

麻生さん

私は逆に子どもと長く居たくても居られないので、それは思ったことはないですが、・・・。

鷺田さん

こんな悠長なことを言っではいけないのかもしれませんが、本来子育ては、相手が人間ですからどういう風に変わっていくか読めないじゃないですか。それは結構子育てのしんどいけれど面白いところでもあるんですね。どうなるか分からないという。でも、どうなるか分からない、何になるか分からないという楽しみがあるんですが、その楽しみに触れる前に、先に心配事ばかりで少しでも自分がこうなってほしいなと言うイメージからずれると「ダメ、ダメ」と、本当の子育ての喜びみたいなものに行く前に「ここは行ったらダメ、そんなことしたらダメ」と、絶えず自分で微修正していかざるを得ないというのが、私は1対1ですずっと向き合っていると、不安になるし責任もあるし、そうせざるを得ないと思います。だから麻生さんをきっちり支えていらっしゃる方、助けて下さる方がいらっしゃるから、いらっしゃるなかったらお仕事と両立は出来ないと思いますが、絶えず関わるメンバーがチェンジするという事は、子育てのみならず介護でもすごく大事なのかなと思います。

麻生さん

そうですね。いろんな環境だったり、いろんな場所でそれがたくさんあればあるほど楽しいのではないかと思います。

鷺田さん

頭の中では同時に、今日の役柄・明日の役柄が渦巻いているのではないのですか。

麻生さん

仕事でもそうですが、その場所に行ってどういうシーンを撮るかとか、その瞬間に考えるというか「自分が必要とされているものは今何なのかな」とか「今これを出さなければいけないのかな」とか、それは日常生活でも大事ですよ。子どもと一緒にいても「今一番大事なことは何かな」とか、「何を一番優先するべきかな」とか、考えていますが上手くいっているかどうかは分かりませんがね。

鷺田さん

大変だろうなという想像しかつきませんが、例えば15分の番組でも、ものすごくたくさんシーンがあると思いますが、1つのシーンを撮るのにどれくらい時間が掛かるものなんでしょうか？

麻生さん

1つのシーンは、すぐ終わる場合もありますし、何時間も掛かる場合もありますし、そ

の時々によっても違います。うちの子どもが、去年の夏休みスタジオに遊びに来て、スタジオを見学して「15分の番組に一週間かかっているのがよく分かったよ」と言って帰って行きましたけれどね。「どうしてそんなにずっと働いているの？」と聞かれましたが。意外と時間が掛かりますね。

鷺田さん

それは演出する人が納得しないのか、それとも出演している人皆が空気で「もう1回、もう1回」と分かるものなんですか？

麻生さん

それも本当にその時々ですね。何かアクシデントがあって上手くいかない時もありますし、上手くいっているけれどももう少し面白くしようとかもう1回やってみようという時もありますし、色々ですね。皆のどれくらいのやる気というか、その日のスケジュールとか色々な問題にもよります。

鷺田さん

実際に会社でもそうですし地域社会でもそうですが、我々が1人でやる事はあんまりなくて、皆とチームやグループや集団でしなければいけない時に、いわゆるお役所のように上司が居て、きちっと固い組織で自分が何をすれば良いのかと考えている時に、上司にお伺いを立てて、そして指示を仰いでという、そういうことで決めていきますよね。でも実際の地域の生活とか会社で、自分たちの部署でやる時は皆で相談しながらしか出来ないですよ。そういう時に自ずとリーダーとかまとめ役とか、そういう人が出てくる場合と、誰かがちゃんと言わないと自ずとまとめ役とそれに従う人が上手く形を取ってこない場合と両方あると思いますが、現場でもそういうことがありますか？

麻生さん

その時々でまとめる人が出てきたり、全くまとめる人がいなかったり様々ですね。

鷺田さん

特に、先ほどのおじさん・おばさんの役を引き受けるとか、市民の役を引き受けるとか言いましたが、我々の地域の暮らしや自分が住んでいる所の暮らしというのは、本当に職業も性格もみんなバラバラです。そのなかでまとめ役というのはどうでしょうか。やりたがりの人が居るか、あるいは皆嫌がって逃げる。これは中学や高校の自治会でもそうですが、仕切りたがりが出てバツと選挙も無しに決まってしまうケースから、皆逃げるケースもありますね。町内でも、「お役」をするのが好きな人と固定メンバーになるケースと、皆逃げて他人に押し付けたり、そういった地域生活で1つハッキリしている事は、皆、本職、本務はよそにあるということですね。自分の職業を持っていらっしゃる、会社の事とかお

店の事がある。そんな中で本務以外のところでも、皆で集まって色んな事を決めないといけない時に上手く「僕はこの役を引き受ける、私はこれを引き受ける」というように、上手く皆がそれぞれの役の分担を、自ずとするような空気があると良いんですけどね。そういう時に自分は今この役をすとか、この役はあの人が良いとか、そういう演じ分けの感覚というものをこれから身に付けないといけないと思います。

麻生さん

そうですね。いろんな役をしていかなければいけませんね。

鷺田さん

コツをぜひお教え頂きたいんですが。

麻生さん

コツはありませんね。本当に毎日必死です。まだお仕事だったら慣れてるので何となくコツは掴んでいます。例えば、昨日も子どもの学校の先生が転勤されるので皆でさよならパーティーをしなければいけないとか、昨日もピザを10枚位抱えて走ったりとか、そういう役割をしました。

鷺田さん

ひっくり返らなかったですか？

麻生さん

日常生活でひっくり返っても誰も楽しんでくれないので。(鷺田、笑) 私も他に仕事があるものでそんなにたくさんの仕事を引き受けられないものですから、出来る時に出来るものに手を挙げて少しずつ参加するようにしていますが、上手くいっているかどうかは分からないですけどね。でも関わっていくと色んな方とそこでお話しが出来ますし「先生はこう思ったんだ」とか「学校はこうなんだ」とか分かるし、楽しい事も多いですけどね。

鷺田さん

ある役を引き受けるとまた新しい文脈が出来てきますね。

照れるということはないですか？私は演劇などをしたことがないので、先程のような啖呵を切るとか、そのような役を自分がすると考えるともの凄く照れてしまいそうな気がします、職業だからありませんかね。

麻生さん

照れは誰にでもあるものですし、恥ずかしいなと言う気持ちは最近すごく私なんかは貴

重だし大事にしないといけないなど。何でも恥ずかしげもなくやってしまうようになってしまったので、そう思うことが恥ずかしいくらいですけど。やっぱりお芝居を始める最初の頃は恥ずかしさの連続で、大きい声も出ないし、例えばお芝居の練習で「じゃあ犬やっごらん、猫やっごらん」とか、そんな事もやったりもしましたが、最初は恥ずかしくて泣きそうになったりすることもありました。実際の撮影のお仕事になってしまうと、そういう恥ずかしがっている時間もないですからね。毎日たくさんの事をこなしていかなければならないので、与えられた中で、お仕事で自分を出していかなければならないですから、仕事に対する照れはなくなってしまいましたね。

鷺田さん

私たちが普段の暮らしの中で新しい役を引き受ける時は、やっぱりすごく照れや迷いがあるって、「こんなんやるって言ったら出しゃばりと思われなだらうか」とか、「自分を目立たせたいだけだと思われなだらうか」と、なかなか自分が新しい役に手を挙げるって結構難しいですよ。

麻生さん

私も日常生活ではそれはかなり難しいです。

アメリカに行ったときに思いましたが、あまり人と話すのが苦手で、人に声をかけられるまで喋れない、答えられないタイプだったんですね。でもそうすると、日本的にはそれは「奥ゆかしい」とか「おとなしい人だ」というように、良い意味で言われることがありますが、外国の人にとっては「ちょっとおかしいんじゃない?」「あの人は失礼だ」という意見が多らしく、これはいけなかったなと思って、それからわりと頑張って自分から声をかけたり、声をかけられない時は話しかけてもらえるように変な T シャツを着て行こうとか、話のきっかけになるような何かを作っていこうかな、という風にしようかなと思いましたね。

鷺田さん

結構仕草とか着ている物とか、そちらから入っていくということは大事なことですよね。成りきるというか、自分がこういうふうに行こうと思う時には大事なんですよ。

麻生さん

そうですね。それでその人のキャラクターが見えることが多いですよ。

鷺田さん

私も30歳過ぎで、2年間程ヨーロッパに住んでいたことがあります、男の子2人の子どもがいて、子どもが小学校2年生と幼稚園の時にいったんですが、幼稚園で数か月何

も喋らないんです。私達からしたら、ドイツだったのでドイツ語を知らないから喋れないのは当たり前で、親がロクに喋れないのにと感じていました。けれど、向こうの人からすれば毎日幼稚園に出てきて、クラスの中において、ドイツ語の中において、先生も話しかけてくれているのに、数か月で一言も喋れないから障害があるんじゃないか、と先生から保護者に相談された事があるんですが、彼は単語では分かっていたんです。けれど「これは～です」というように完全な文章で喋れないといけないと思いついでいるから、知っている単語でも反復しない。ある時、うさぎとかぞうとか動物がいっぱい出てきてその名前を言う検査があって、単語だけで良いので喋っていたら先生が「話せるじゃないか！」とびっくりしていました。男の子だからダメなのか、同じくらいの日本人の女の子はよく聞くと文章が無茶苦茶なのにそれっぽく聞こえます。子どもの時でもあんなに役を演じるとか、言葉を話すことについての感受性がこんなにも男の子と女の子で違うのかと、驚きました。私も言葉では痛い思いをしていて、今言いましたように「あまり言葉も上手くないのに出しゃばって話すのは嫌だ」とか、「どうせ話すなら後で凄いとんでもらえるような良い事を言おう」とか、それをまた文章でちゃんとよおうとすると言葉が出てこなくて黙っていると、段々皆の見る目が冷たくなってきました。つまり喋れないということは何も考えていないことだと捉えられるんですね。言葉の問題はそういう意味ではすごくしんどかったです。

子供の時からコミュニケーションを取るとか、いわば引っ込み思案であったりした麻生さんが、演劇をお仕事にされたところか、時には演劇の事をストップしてもコミュニケーションと言う意味では逆境というか一番きつい場所に自分を置かれたということに、すごく驚きました。

麻生さん

そうですね。だから今でも本当に私はこの仕事に向いていないと思いますし、今でも必ず緊張するし、「これで良いのかな、いや良くないんだけど大丈夫かな」と毎日思っています。でも一人一人をちゃんと伝えていく事で、私も見ている人と繋がっているのではないかなとか、そうやって私がやっている意味とまでは言わないですけど、見つけてほしいなとか、面白いなとか、あの人変だよなとか、何か思ってもらえたら繋がっているのかなという事を頼りにやっている気がしますね。

驚田さん

それは日常生活でも？

麻生さん

そうですね。上手くは言えないけれど、何かちょっと伝わっているかな。伝わっていない時もありますが・・・、難しいですね。

鷺田さん

私だったらと思いますが、麻生さんの場合、いわゆる女優さんだったら、皆こんなイメージで、と決めつけて見るということが、逆に鬱陶しくないですか？

麻生さん

そこまで考える余裕はないですね。あまりそれは考えていないですね。常に自分のやる仕事のことを考えるのに一生懸命で、あまりそこまではちょっと考えようがないですね、怖くて。

鷺田さん

これは何でしょうか。（「泉佐野市観光大使」の文字が記されたマフラータオルを取り出し観客に見せる）

麻生さん

泉佐野市の観光大使をさせて頂いてしまして、今年の1月からですが、カーネーションで泉州の言葉を喋ったという事もあって抜擢して頂いたんですが、これから泉佐野市や泉州の魅力を皆さんに伝えていければと。

鷺田さん

新たに役を1つ引き受けられたんですね。

麻生さん

そうなんですよ。大変なお仕事ですね。

鷺田さん

まだこれから？

麻生さん

まだこれからですね。たくさん名刺を作って頂いて、人生初の名刺なんです。だから名刺ってどうやって出したら良いのかなとか、ちゃんと名刺のケースにたくさん入っていて、「ああ凄い立派な役職をいただいたな」と思って、見るだけで緊張しちゃうんです。

鷺田さん

肩書はこれで？（「観光大使」の文字を指さす）

麻生さん

肩書はそれです。

鷺田さん

「俳優」とかは書いていないんですか？

麻生さん

書いていないですね。「観光大使」と。

鷺田さん

お一人でされるんですか？

麻生さん

あと、家田荘子さんという作家の先生がもう1人最近観光大使に。

鷺田さん

じゃあまたよく大阪でお目にかかれるんですか？

麻生さん

まだこれからですね。

鷺田さん

楽しみですか？

麻生さん

そうですね。やっぱり両親はとても喜んでいましたし、私も生まれ育った所で一番よく知っている所ですから、そうやって良さを知って頂けると良いなと思います。

鷺田さん

お墓の肩書も1つ増えますね。

麻生さん

そうですね。肩書がいっぱいあると偉くなった気がします。

鷺田さん

それでアメリカに行かれて、私からしたら順風満帆でいらっしやって、お一人でアメリカに生活として初めて行かれて、日本の大学と雲泥の差の厳しさで、そんな厳しい環境の

中に自分を置かれて、それは今の麻生さんにはどのような跡を残しましたか。

麻生さん

仕事を中断して行ったものですから、やっぱりコンスタントに来るお仕事をさせて頂けるような運が良ければ、という世界なので、もう仕事が出来ないんじゃないかと心配して下さったんですけど、やっぱりこのままやるよりも、もうちょっといろんな経験や勉強をして、もっといろんな世界を見ておかないといけないなと思ったものですから。でも実際本当に今いろんな所に行って、いろんな経験をして、いろんな人と喋った事は良い事だったなとつくづく思います。

鷺田さん

それまではすごくアイドルとかスターのイメージがあって、でもアメリカから帰られて復帰されてから、特に最近の作品を見せて頂いたら今回のカーネーションがその典型ですが、すごく大事な脇役というものが結構増えてらっしゃったんですよね。

麻生さん

主人公が自分の気持ちを素直に言えたり、相談出来たり、成長を見守ったりっていうのが増えてきましたね。

鷺田さん

ファニーな役の時でも見守ることが多いですか？

麻生さん

より楽しんで最近は出来るようになりましたね。若い時は、どうしてもこうなりたいとか、自分の今まで何か見た物のイメージでそれに近づきたい、と思ってやってきましたが、最近は自分のオリジナリティー・自分だけにしかない何かを出していきたいなとか、見てくれる人の事を考えないといけないなとか、こうしたら楽しんでもらえるかなとか、そう思いながら自分も楽しんでやっているような気がします。

鷺田さん

そういう意味では演じられる部分が広がってきているんですね。

私達がドラマを見る時に、まずヒロインとかヒーローが印象強いし、その人の役柄でその物語が出来ていきますが、その連続ドラマや映画が終わった後に残っている物というのは、意外と脇役の人の言葉に出来ないイメージだけが、作品が終ってから残るんですね。もちろん主演を演じた人の俳優さんとしてのキャラクターとかイメージは強烈ですけども、脇役の方が演じられた「ああ、あの女優さんこんなだったなあ、俳優さんこんな

だったなあ」というのもありますが、もう1つ「ああ、あんな人いたなあ」というリアリティーは脇役の人がなされた役の方が残っていて、主人公のほうはむしろ物語の中の人のように、番組が終わってからは逆転する所が、結構見る者としてはあるんですよね。

麻生さん

そうですね。主役の人は全体の話を引き張っていくという大役がありますので、周りの人がわりとリアリティーに「実際こういう人いるよね」と言う人が多くて、まさにそうですね。

鷺田さん

男優でしたら私がすごく気になっているのは岸部一徳さんで、彼を何故気になっているのかというと、高校の時に私もバンドをしていて、当時はエレキをするのは不良だと新聞に論説されて、ちょっと学校で悪いイメージで見られて、そうすると各学校で悪いイメージで見られている者がたまに練習場で接触があったりします。彼はもちろん覚えていなかったんですが、あるコンテストの楽屋で一緒だったことがあって、彼らはデビュー前でしたがすごくチームとしてレベルが高かったので、僕らダメだと思い止める決心がついたんです。

麻生さん

不良じゃなかったんですか？

鷺田さん

もう1つ止める決心が付いたのが、彼ら結構カッコいい長髪でしょ？私はまだ高校生でしたがなんとなく毛が柔らかくて、僕はあのような長髪はもしかしたら続けられないのかもしれないんじゃないかと。ファンの人を裏切ってはいけないと思って。

それで10代の頃から彼を知っていましたので、彼は大学を辞めてから一時期ブラブラしていて、それからピンク映画にも出ておられましたよね。色んな事を苦労されて、今は脇役。あの人はたぶん主人公をされたことは無いと思います。

けれど、どの番組を見ても味わい深くて、その時に「彼のやっている仕事って何なんだろう」と思ったことがあるんですよね。今でも映画俳優の人で名脇役は映画史上たくさんいらっしゃるんですよね。そういう人達、名脇役の人達は何が違うんだろうとずっと考えているんです。

一見分かりやすい脇役と言うのは、つまり（水戸黄門の）助さん格さんのような、性格が正反対のタイプがいて、逆にその人がいることで相手がますます際立って見えるというものがありますよね。

それで、(水谷豊主演の事件ドラマで、テレビ朝日の)「相棒」のことを考えるんですが、これは刑事二人が主人公のドラマなんですが、刑事の二人組がいてそれがスケさんカクさんなんです。そして、その構図のなかに岸部一徳さんが上司でいる。

この岸部さんがちっとも共感できない発言ばかりするんですよ。主人公の水谷さんの刑事らに私たちは思い入れがあって、上司の岸部さんに対しては、「ここで意気を感じて(励まして) やれや」とか「ここではっきり言ってくれたら!」と思うところで、岸部さんは何も言わないで謎めいた表情をして、うじうじ、うじうじしてるんですよ、本気で言っているのか冗談でからかっているのか、「ごはんでも食べに行こうか」「ひるめしでも食べに行こうか」とか言って、謎を少し残したままいつも番組が終わってしまうので「なんやあの役は」と最初は思っていました、段々病み付きになっていった時に、私は哲学者ですから意味を考えますが(会場、笑)、やっぱりすごい脇役というのは、主人公の引き立て役や、単なる反対のキャラで主人公をよりクッキリさせる役ではなくて、物語が終わっても「お話としてはそうだけれど、実際の世の中ではあんな風にはいかないよね」という部分をしっかりと引きずって来て、その印象が、番組の中ではイライラするんだけど、「実生活の中ではあんな人いるよな、ああいうひと必要なんだな」という印象が残って、イメージを引きずるんですね。あれが不思議だなといつも思います。

麻生さん

そうですね。そういう連続のドラマの場合は、特にそういうキャラクターが作りやすいですよ。そこだけ見ると「あの人何なのかな」と思います。

鷺田さん

カーネーションの麻生さんにもそういう感じがしますね。一見天然風ですが、先程おっしゃったように、聞いているふりかもしれないけれども、夫の善作(小林薫)さんとやりあっている時でも、いつもどこかに映っていて、その時にちゃんと何も言わない。「ここで間に入ってあげたら」と言う時でも、怖い事もあって何も仰らないんですけど、映ってるんですよ、端っこに。そして意外と全部見ているという位置じゃないですか。

麻生さん

そうですね。ちゃんといつも映っていたので気が抜けませんでした。わりとあまり物語と関係のない所でもちゃんとどこかで聞いているという人でした。

鷺田さん

それがさっきの岸部さんで、番組中ではイライラするけれども、終わって自分の周りを振り返った時に「ああいう人っているんだなあ、必要なんだなあ」という意味も含めていられるんですよ。だからカーネーションが終わってからは、麻生さんの存在とか、おばあち

やん役の正司さんも比較的早く亡くなったけれども何か残っていますよね。見る人は、い
とこの恋人の周防さんの方が印象的かもしれませんが、私としては主人公を引き立てるあ
る意味では脇役です。でも番組が終わってしまうと、女性の場合は知りませんが、私達は
周防さんのイメージは消えてしまって、近藤正臣さんが演じた人も「ああいう人もいるな
あ」というイメージだけで、そういった脇役の方が、俳優さんのせいではなく、役付の中
で残ります。脇役でも2種類あるのかなあとも思ったりします。

麻生さん

そうですね。そこまで考えたことはなかったです。

鷺田さん

でも全体を見ていると仰っていましたが、東京に帰られたら忘れられてるんですか？そ
れとも自分が留守中に他のメンバーがやっているあのシーンとか気になられるんですか？

麻生さん

今回は気になりましたね。やはり私の仕事は1日何役も色んな人を何人もしたりしますが、
今回はこんなに1年近くも同じ役というのも初めてなんですが、家族のシーンが多か
ったし、家族がともしっかりしていたんですね。ですからお話の上とはいえ、おばあち
ゃんが亡くなったりした時は本当に悲しかったし、しばらく皆雑談しないでボーっと座っ
ていました。「ああ今日おばあちゃん来ないんだあ」とすごく寂しい雰囲気になっていて、
今回は初めての経験ですね。皆元気かなあとか今でも思いますね。

鷺田さん

すごいですね。

麻生さん

そうですね。

鷺田さん

何かを演じる、あるいは演じ分けるといふ時に、ついつい私は社会の中で自分が演じる
事と、俳優さんとして演じる事をいつも重ね合わせて、どういう事を学んだら良いのかな
あとまじめに考えてしまいます。先程言ったように、地域社会では本職のリーダーはいな
いわけで、それだったら政治家になってしまう。皆交代で、リーダー・まとめ役やいろん
な役を演じなければいけないんですが、大事な事は、カーネーションでお母さんの役がそ
うであったように、全体を引いて見るということ。つまり、リーダーに色んな事を任せる
けれども、本来はリーダーが全体を見渡す役ですが、本職のリーダーじゃなくて、皆が交

代でリーダーを務めるというような、そういう地域社会では、全体を見るというのはリーダーではなくむしろフォロワーの方。つまり「あの人にしばらく任せるし、出来るだけ素直にあまり邪魔しないようにしよう」と思って脇役になっている人こそが、全体を見ないといけない、そういう事が地域社会なのではないかと思うんですよね。ですから、「リーダーが一生懸命やりすぎて続かないのではないか」とか、あるいは「リーダーこの辺は全然見えていないんじゃないか」とか、「ちょっとバランス崩れてきているな」とか、「あんまりリーダーが頑張るんで逆にやる気を無くした人も出てきている」とか、一歩下がって全体をケアするという、そういった脇役のようなものに一人一人がいつでもなっていないといけないのではないかと思います。

麻生さん

私の仕事はまさにそうですし、実際子どもを持っていたり、色んな役割をやっていたりすると本当に1人では何も出来ないの、人と上手く・楽しく関わっていくには調和というか、自分が発信して助け合っていないと何も出来ませんよね。

鷲田さん

それも、固定した役割ではなくて、状況次第で今はこの役というような。

麻生さん

ちょっとだけリーダーになるとか、ちょっとだけ休憩する時もあるけれど、時々交代しながら、とかですね。

鷲田さん

スポーツで言うと、私はラグビーが好きです。理由は大きくて強いマッチョな人ばかりではなく、ラグビーは、大男で筋肉隆々100kg以上という人も居れば、本当に小さい人も居るじゃないですか。細かく動く人。それから妙にイケメンが多いですが、頭脳派で全体にビビッとフォーメーションを考えて指示を与えたりするような、細い頭脳派のイメージの人から、大男の突進型から、ちっちゃいちっちゃいちょこちょこ間を動く人とか、いろんなタイプの人が必要なんです。ですからラグビーでは名脇役が全部揃っているというイメージがあります。

麻生さん

自分の役を分かって發揮していますよね。

鷲田さん

誰がいつも表に出る、ということは決まっていなくて。

麻生さん

助け合い、交代しながら。

鷺田さん

主人公がどんどん変わっていくということで、スポーツでは私は好きです。

そういう意味で全体を見て、そして臨機応変に。先程仰ったように、今この集団に必要な事は何なのかと考えて、自分がその役をやるのか、あの人にやらしてもらおうのか、色々臨機応変で演じ分けるんですね。

麻生さん

瞬間、瞬間で、ですね。私の仕事は本当に瞬間でそれが目まぐるしく変わるので、例えば、映画やドラマでは監督が1番色々決めたり指示を出したり動いて下さったりなどのリーダーはいるんですけど、監督がいない場所で演じるのは私達俳優ですから、その俳優の中でも暗黙の了解で「このシーンはこの人が引っ張っていくんだな」とか「じゃあそのタイミングで私はこれに乗っていこうかな」といった、暗黙の了解といたしますか、本当にスポーツに似ていますが、「誰かパスをしたら次はこうやってフェイントで次がパスする」とか、そういうことが瞬間・瞬間で変わっていく面白さがありますね。

鷺田さん

そういう目で、これからの麻生さんの演技も。いつもテレビの端っこの方を、ずーっと・・・。

麻生さん

気を抜けない、責任のあるお仕事なので何とか頑張ろうと思います。

【質疑応答】

質問. 演技のレッスンをする機会があるんですが、ついつい毎回緊張してしまって声が震えたりするんですが、緊張しない方法ってありますか？

麻生さん

私もまだ緊張しているんですけどね。難しいですね。その殻を破る瞬間がどうやっていつ訪れるのか分かりませんが、どうしても緊張してしまう時は、私は逆に無理やり大きな声を出してしまうとか。あとは少し運動をして体をリラックスさせるとか。

鷺田さん

本当に緊張されているんですか？

麻生さん

すごく慣れない環境なので緊張してしまいます。いつも考えて起こる事が分かってしていますから、今日のような自分の事を話すのは一番緊張します。

鷺田さん

スキャンダルとかの記者会見があると鍛えられるのかもしれませんがね（会場、笑）。

質問. プロの演奏家の方だったら毎日演奏の練習をしなければいけないとか、スポーツの選手だったら練習を続けなければいけないということがありますが、俳優さんとして毎日続けなければいけない事とか、これを気にして毎日を過ごしているという事があれば教えて下さい。

麻生さん

一生懸命楽しんで役を演じたいと思っているので、まずキャラクターはきちんと作っていきたいと思うのと、その人がどんな性格の人であれ、皆に楽しんでもらえる人だったら良いと思うのと、あとは人が好きなので、わりと街に出たりするとよく人を見ています。「ああ、あの人はあんな歩き方するんだ」とか「へえ、そんなふうな喋り方するんだ」とか「へえ、あの靴とあの帽子合わせるんだ」とか、そんな事はよく観察していますね。

質問. 私が個人的にお聞きしたいんですが、麻生さんはどうしてそんなにいつまでもお美しいのでしょうか。結構女性の中から質問が出ていましたので、努力されている事とか何かあれば教えて頂きたいです。

麻生さん

今日はたまたま先生にお会いするので、一生懸命おしゃれをしてお化粧をして、普段は普通のおばさんなんですけど、仕事柄、肉体労働者なので、普段からわりと運動をして食事もしっかりいただきますが、健康はとても気にしています。それくらいですかね。

鷺田さん

みんな健康を気にしているんですけれどね。

麻生さん

でも立派なおばあちゃんもやれるようになりましたし、元気なおばあちゃん目指して頑張ります。

質問. 非常に一般的な事ですが、麻生さんの小さい時、小学校の頃に一番心に残っている思い出を1つお聞かせ下さい。楽しかった事・悲しかった事の思い出など。

麻生さん

やっぱりおしゃべりする事が苦手な毎日絵ばかり描いていたんですが、その絵をとてほめて下さった先生がいて、ちょっと変わった色というか、いろんな色を使うあまりどんどん色が汚くなってしまって、暗い絵になってしまったことがあったんですが、ほめて下さる先生がいて「そのまま自由に描いたらもっと面白くなるから」と言って下さった先生はとても印象に残っています。何か一言そうやって声を掛けて頂いただけで、すごくうれしかった思い出があります。ひと言、って大事だなと思いました。

質問. 女優さんと言うと、周りは若い方をちやほやされたりすることもあると思いますが、そういうところでハリウッドでは段々年齢が上になっていくと限られた役しか出来ないといった話を聞きますが、自分の中で、例えば今回すごく年齢の高い役をされましたが、そういう年齢を重ねていく上で、自分の壁のようなところを越える事についてのこだわりといったものはありませんでしたか。

麻生さん

それはあまり考えたことがなかったですね。年齢と言うよりも、どうやったら面白くなるかなという事をいつも優先に考えてしまいますので。実際私は日常生活ではお化粧もしないで T シャツとジーンズで走り回ってドロドロになって生活していますから、その方が落ち着くといえますか。今日のような恰好をしていたり、例えば会社の出来る上司だとか、あとは今回の役もそうでしたが神戸のお嬢様とか、そういう知らない世界の役が来るととても緊張して難しいですが、何でも楽しんでやれたら良いなと思います。あとはやはり外国と比べて、どうしても日本のテレビや映画は年齢層が若いジャンルの中心が多い気が私もしているのですが、もっと40代・50代の女の人、もっと60代・70代、子育てとかそういう事だけではなくて、もっと楽しい事をしている人がたくさんいますし、もっと女の人の面白いお話があったら良いなとは常々思いますし、見たいですね。

質問. 例えば今後こういう役をしたいとか、こういう人物を演じたいというのはありますか？

麻生さん

大抵長年色んな職業をやってきたので、多分やってない事はないと思っていたんですが、学校の先生は今までやったことがないですね。前にも「意外ですね」と言われたことがあ

るんですが、何故か先生の役がきたことがなくて。

鷺田さん

私、演技指導したいんですが。

麻生さん

修行に行きます。

鷺田さん

そうですか。

麻生さん

やっぱり人に教えるという事は、私も一番苦手なので。やっぱり苦手っていう事が出るのかなと思います。先生は苦手ですね。

鷺田さん

今の質疑応答の時でも、子ども時代の一番大切な思い出で、先生が「それで良いんだ」と「それをもっとやりなさい」という、ひと言をかけられるという事がすごく大事なんだという事がとても心に残りました。

人間は、壮年期までは「自分が喜びたい、満足したい、生きがいを持ってやりたい」と、自分の事がどうしても先に立ちますが、年を取ると、人を喜ばせて喜ぶという、つまり、おじいちゃん・おばあちゃんが責任のない孫にいたずらをして一緒に遊ぶことを喜ぶということがありますよね。だから人を喜ばせて喜ぶという、そういう事が自分の本当の楽しみになる時期って人生ですごく良い時なのではないかと思っていて、そういう意味では麻生さんは画面を通じて、最近特にカーネーションで名脇役として私達を喜ばせて下さったので、良いお仕事だなと思っています。

今日、実は最後なので言いますが、300人の定員だったところに1500人も応募して下さいだったので、皆さん大学受験より難関を突破していらっしゃるってラッキーなんです。それほどドラマが終わってからも麻生さんの存在感があるのではないかと思いますので、ぜひまたNHK大阪局の作品にカムバックをお願いしたいと思います。

(終わり)